

歌枕

2025. 10. 20

国語の先生をしていた。そのためもあって、和歌について勉強してきている。和歌とは、短歌形式の古典詩である。古典短歌と言ったほうがよいかもしれない。教科書にも載っている。「万葉集」や「古今和歌集」「新古今和歌集」などがある。最も有名なものといったら「百人一首」だろうか。

「歌枕（うたまくら）」というものがある。和歌に繰り返し詠み込まれる特定の場所のことである。名所旧跡が多い。では、和歌を詠む歌人たちが、実際にその場所を訪れているかということ、それは稀なことである。

福島県の歌枕を見てみる。「白河の関」「安積山」「阿武隈川」「信夫」がある。信夫とは、福島市のことである。今でも、福島市には信夫という名称がある。信夫山、信夫の里、信夫地区などである。

このようなことが意外と知られていないのではないか。歌枕である信夫を舞台に詠まれた歌がある。

みちのくの　しのぶもちずり　誰（たれ）ゆゑに　乱れそめにし　われならなくに

作者は、河原左大臣（かわらのさだいじん）である。嵯峨天皇の皇子である源融（みなもとのおる）のことである。この歌は、古今和歌集に収められており、百人一首にも選ばれている。心に秘めた片思い、忍ぶ恋を詠んだ歌で、在原業平の作と言われる恋物語「伊勢物語」の最初の段にも引用されている。百人一首の選者である、かの藤原定家も「信夫もちずり」の歌を作っており、「しのぶもちずり」が人気の題材だったことが伺える。

この「しのぶもちずり」を作るために使った「文知摺石」は、今でも福島市に残っている。江戸時代には、「奥の細道」の旅行で松尾芭蕉が信夫の里に寄り、この石を見ていったという記述がある。文知摺石があるのが「文知摺観音」である。

紅葉シーズンを迎えている。毎年、桜と同じように、どこの紅葉を愛でようかと迷う。近場でお勧めできるのが文知摺観音である。ここの紅葉は見事である。規模は大きくはないのだが、紅葉の葉っぱがきれいに色づく。文知摺石を見ながら、紅葉を楽しむのもわるくはない。せっかく近くに歌枕があるのだから、訪れておくべきであろう。いつでも行けると思っていると、結局なかなか足が向かないものである。文知摺観音の紅葉は、秋を感じさせる信夫の宝物である。